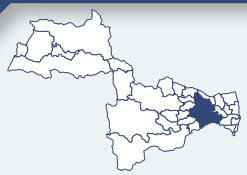
次代に伝えたい私たちの想い

浪江町各地区の代表者が語る、震災当時の様子、避難期の生活、次代に伝えたい教訓、ふるさとへの想い…。私たちの想いを未来へ――。



約100年におよぶ商いは仕舞いとなったが、祭りの灯はこれからも絶やさないでほしい。

権現堂2区

西山 隆雄 さん

震災時は西山糀屋という味噌屋を営んでいました。私は教員を退職した後、店に携わっており、近所の店に用事で買い物に行っていました。急いで家に戻ると、崩れた土蔵から土煙が上がるなか、家内が愛犬と一緒に立ち尽くしていました。避難生活は4年半におよび、現在は息子夫婦と相馬市に住んでいます。いつかは浪江町に帰りたいと自宅を建て直してありますが、店の再開は難しいと思います。店のものはすべて処分してしまいましたから。

店は続けられませんでしたが、次代に伝えたいものがあります。浪江神社の秋の例大祭と十日市祭です。特に十日市祭は、大人にも子どもにもとても親しまれていて、故郷を離れても忘れられないものです。町のいろいろな人たち――警察官、消防士、教員、子どもまでもが協力し合い、執り行ってきた町を挙げての祭り。これが人々の連帯感を培ってきたのだと思います。これからは新しい住民が人々とつながるきっかけにもなってくれる。こういった祭りの灯を絶やさず、復興のシンボルにしてほしいですね。

2011年4月、一時帰宅の様子

震災で苦労した子どもたちを守り、その元気を町の元気につなげたい。

権現堂4区

畠山 熙一郎 さん

被災直後は町内の1,700人以上の児童・生徒がどこへ避難したか分からない状況でした。教育行政を担う私には、子どもたちが避難先でも学校に通えるようにする責務がありました。遠方への避難者も多く、直接関われる子どもは限られたのですが、町内の教員と三十数カ所の避難所を回って所在を確かめました。そのことで子どもたちは何とか4月からの学校生活を始めることができました。避難先での再開校では、ふるさととの結びつきを保てるよう「ふるさと学習」にも力を入れました。これらは、困難なことが多かった当時のとても大事な思い出です。

2017年に町に戻ってからの大きな課題は、新たな認定こども園と学校を開くことで、翌年には多くの人々のお力添えで「浪江にじいろこども園」と「なみえ創成小・中学校」が開設されました。現在、そこには楽しく集う子どもたちの姿があり、子どもたちの元気や頑張りが周囲の人々を明るくしています。今後、子どもと大人の頑張りをしっかりつなげていけば、時間はかかっても復興はできる、そのように私は思います。

2018年4月、なみえ創成小・中学校校舎落成式

すっかり様変わりしてしまった町の姿。かつての故郷が懐かしい。

権現堂4区

峯　勝美 さん

震災によって浪江町はすっかり様変わりしてしまいました。町の東側の再建は進んでいますが、私の自宅がある中心部はまだまだ手付かずです。自宅の前から、かつては見えなかったJR常磐線を走る列車が見える。地震があった日に外構工事に携わっていた浪江町地域スポーツセンターも見える。それだけ街並みに隙間があるということです。せめてサンプラザのショッピングセンターが残っていたら、町を活性化させるきっかけにできたのではと残念に思っています。私は地区の神楽に取り組んでいるのですが、神楽の衣装や道具は教育委員会預かりで、小学校が保管場所にあてられていました。その小学校も解体されてしまい、この先どうなるか分かっていません。伝統芸能の保存・継承も視野に入れた整備計画を望みます。

震災後に復活した権現堂神楽

2017年に南相馬市の今の住まいに移り、落ち着かなかった避難生活からようやく一息つくことができました。でも、どうしても生まれ故郷とは違う。隣近所には話し相手もおらず、少し寂しい気持ちを感じています。

江戸末期の飢饉、大火から復興し、また被災した故郷「権現堂新町」へ戻る

権現堂5区

小野 幸記 さん

東日本大震災後の避難生活の10年近くを福島市でお世話になりました。その間、様々な経験をしましたが、将来浪江町に戻るために、町の情報収集と農地、建物の維持管理を継続してきました。

私の住んでいる権現堂は、江戸末期（安政6年）の大火で焼失し、それまで進めていた飢饉からの復興は一時立ち遅れました。それを相馬藩の二宮尊徳さんの弟子である藩士、住民が一体となって、「報徳仕法」により短期間で復興したのです。

災害は自然災、人為災、共に定期的に複合的に繰り返し発生します。尊徳さんはこれを「災害は化育しながら繰り返す」、常に防災の準備が必要と言っています。復興の道しるべとなる「報徳」とは、「至誠（嘘偽りのない真心と実行）」「勤労（豊かに生きるために働く）」「分度（分限（収入）の中で度（支出）を計る）」「推譲（自譲（自分）他譲（社会）残して譲る」と教えています。浪江町はもちろん、相馬地方で生まれ育った人々の心に築く道しるべだと考えます。

震災時に割れた二宮尊徳の絵皿は、元通りに修復した

たくさんの人たちが行き交う町となることを祈っています。

権現堂6区

小野田 紀宗 さん

私は浪江町で生まれ育ち、父が経営していた洋服店を継ぎました。震災当時は区長を務めていましたので、区民の安否確認を行った後で、妻と車で避難したのですが、ものすごい渋滞で津島へ着いたのは夜7時過ぎでした。震災から4日が過ぎてようやく娘と連絡がつき、茨城県つくば市へと避難したのですが、ガソリンもなく大変苦労しました。

翌日、千葉に住む息子の家に避難し、3カ月暮らしましたが、浪江町の情報が入ってこないので、ひとまず福島市に住む娘の家に身を寄せた後、借上住宅のアパートに入居しました。妻と一緒ではありますが、70歳にして初めてのアパート生活は私には何とも寂しい出来事で、これを境に家業の継続を断念し、浪江町には戻らないことを決め、福島市に家を建てました。

ふるさとの復旧でいま思うことは、駅前の活性化と学校の合併のこと。すべての町民の意見を反映するのは難しいと思いますが、たくさんの人たちが行き交う町になることを心より祈っています。

浪江町の自宅玄関に飾っていた剥製（震災後に撮影）

思い出すのは浪江での穏やかな日々。これからも町の行方を見守っていきたい。

権現堂8区

佐々木 庸太郎 さん

喜久弥という菓子店を父から受け継ぎ二代目として営んでいました。震災の頃はお店もがらんとしていて、ご近所が集まってお茶飲みして過ごすような毎日でした。避難はまず大玉村の娘のもとへ。その後、白河市にある親戚の家がたまたま空いていて、布団や家財道具なども自由に使えたので、落ち着くことができました。2004年から始めた交通教育専門員の仕事にこちらでも携わり、近所の畑を借りてじゃが芋を作るなど、地域に溶け込むことができました。それでも、やはり町に帰りたい気持ちは大きいです。浪江とともに歩んできた人生、ゆくゆくは浪江のお墓に入るんだから。

実家は町の駅前整備事業に協力して解体しましたが、息子の家があった上ノ原に小さな家を建てて、白河と浪江とを行き来する暮らしができたらと考えています。今でも散り散りになってしまった町の人たちが元気に暮らしているか気がかりです。新聞で真っ先に見るのはお悔やみ欄。知り合いの名前を見つける度に寂しさが募ります。小さくてもいいから浪江に家を建てて、町の行方を見守っていきたいですね。

今も毎朝子どもたちの安全な登校をお手伝い

地震直後も避難先でも助け合いを。自分は絆を大切にする根っからの浪江っ子。

川添北行政区

鈴木　充 さん

川添北地区には約400戸の世帯がありますが、私は区長として、一人暮らしや高齢者のみの世帯、身体が不自由な人などを全部把握していました。そのため、地震が収まった後から、そういう人たちを優先的に見て回り、安否確認をしていました。そのときは無我夢中。原発事故が起こっていたことも知りませんでした。

その後、遅ればせながら避難しましたが、結局町外への避難を余儀なくされ、二本松市、そして東京都立川市へと移動。しかし、ＪＲ東日本から線路の点検・保守の依頼があり、被災から10日ぐらいで家族と別れて一人いわき市に住むことになりました。いわき市には浪江町からも多くの人が避難していましたが、役場の手が回らず、一人暮らしや高齢者夫婦が困っていました。そこで「いわき絆会」というボランティア組織を結成。浪江町からの避難者の見守り活動を約４年間行いました。

いざというときにお互い助け合う心、絆を保つことができ、自分は根っからの浪江っ子なのだということを実感しています。

川添地区で震災後に定植されたエゴマ

浪江町でこれからも仕事を続けていきたい。そのためにも人が集まる町に。

川添北行政区

大和田 和雪 さん

震災前そして現在もLPガス販売事業を行っています。地震直後は、従業員と手分けしてアパートや飲食店、一般家庭を回って、保安に努めました。実家のある西白河郡西郷村から、そして白河市に避難してからも、公益目的での一時立入許可を得て町に通いました。必ず町に帰る、そう決めていたのです。その後、役場が本庁舎での業務を再開するときに、役場と消防署のガス設備を整えました。問屋が町内に入れないため、立入区域の境までガスボンベを受け取りに行き、時間に追われ大変な思いもしましたが、「町を復活させるにはインフラ整備は不可欠」。それが頭にあったからできたのだと思います。

西郷村生まれの私が、縁あって浪江町に根を下ろすことになりました。親の転勤でいろいろな土地を巡りましたが、ここが一番いいですね。気候はいいし、空も広い。なんとなく安らぐし、落ち着きます。これからもかつてのように人が集まる町を目指して前進したいです。駅周辺の整備に期待しています。

浪江町で営業を再開した大和田商店

つらいことも楽しいこともあった避難生活。それを経て地元の仲間の大切さに気づいた。

川添南行政区

渡部　宏 さん

避難生活には、辛い思い出も楽しい思い出もあります。二本松市の体育館では、多くの人と雑魚寝のようにして寝たことが辛かった。北塩原村では、指定されたペンションに偶然隣近所の家族が集まり、山菜を採ったりして楽しかった。その後は本宮市の応急仮設住宅に移り、ようやく郡山市に居を構えました。震災から２年以上が経っていました。

2017年３月に避難指示区域が解除されるまでは、郡山から山の方に足を延ばして自然を楽しむことも多かったのですが、解除後は、生まれ育った地元の様子が以前にも増して気になるようになりました。自宅の手入れもしなければならない。帰ってみると、同じように帰ってくる人がいました。彼らに会えるのが楽しみになって自然に足が向くようになりました。現在では、週に２回浪江町に帰り、同じ顔ぶれで昔話に花を咲かせています。

これからは、成功事例や専門家の意見などを参考にして、魅力のある浪江町をつくってほしい。特に若い人たちのいろいろな挑戦に期待しています。

近所が集った北塩原村のペンション

もう一度花の咲き誇る美しい故郷の風景を取り戻したい。

上ノ原行政区

佐藤 秀雄 さん

楢葉町の職場で働いている時、地割れが起こるほど大きな地震に襲われました。道路の陥没などで車の渋滞が起こり、浪江の自宅へ帰ってくるだけで6時間を要しました。家族との再会を果たすと身を寄せ合うように囲炉裏こたつで一晩過ごしました。その後、津島、栃木市と、家族で避難しました。それから私は仕事で家族とは離れ、茨城や浜通りを転々としました。60歳を機に退職し、現在は上ノ原地区のためにできることに取り組んでいます。父が建て、長く住み続けてきた実家は愛着がありましたが、傷みが激しく解体せざるを得ませんでした。

「浜に戻りたい」という父の希望で相馬市に家を建てましたが、週末は実家の跡地に設置したトレーラーハウスに寝泊まりして、草刈りや地区内の見回りなどを行っています。年に数回、住民だけでなく避難している人も集まり、プランターの花で地区の道端を飾る活動もしています。震災前、浪江には町の花であるコスモスが咲き誇っていました。一人より二人、十人より百人と、私たちの活動を継続して、もう一度花の咲き誇る町にできたらと思います。

花植えに汗を流す住民たち

新たな体験を前向きにとらえることも大切。少しずつでも前に進みたい。

牛渡・樋渡行政区

鈴木 辰行 さん

現在は、宮城県名取市の息子宅と浪江町の自宅を行き来する生活を送っています。被災後は、埼玉県に住む娘を頼ったり、応急仮設住宅（東京都江東区東雲の公務員宿舎）に入るなどして、福島県を離れることになりました。当時は浪江町議会議員でしたが、その務めを十分に果たせなかったことを申し訳なく思っていました。その一方で、これまでとは違った環境での生活のなかには、新しい発見や体験もありましたね。震災は良くも悪くも人生に大きな転機をもたらしました。親戚や知人が亡くなるなど辛いこともたくさんありましたが、新たなものとの出合いにもつながった。未来のためには前向きにとらえることも必要でしょう。

やはり浪江町は存続してほしい。そのためには何かを行わなければなりません。たとえば、浜通り地方に不足してしまった老人介護施設をつくるなど。意見には必ず賛否両論が出てきます。しかし、否定ばかりでは前に進まない。意見を検討しながら、少しずつでも前に進んでいければいいと思います。

孫が7人。そのうち4人は震災後に生まれました

米や野菜や花きを育んだ農地。守ってきた土地の未来を信じて。

高瀬行政区

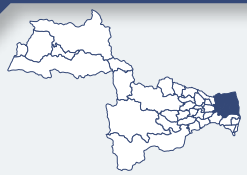
清水 淳助 さん

震災直後は津島、その後、福島、二本松と、住まいを転々とし、最終的には南相馬に。70歳で原子力発電所の放射線検査の仕事を辞めてからは、農業を専業としていたので、土地に対する思いが強かったのかもしれません。少しでも浪江町に近い場所にいたいという気持ちがありました。

その後、許可制で町への出入りが可能になると、農地や家の点検や安全パトロールのために許可をもらい、故郷の土を踏めるようになりました。その後、仕事柄、放射線についての知識・経験があったことから、町内の除染作業や除染廃棄物保管場所準備に携わりました。町の人からは「任せておけば安心」と言ってもらえました。

先祖伝来の土地を荒らすことなく守りたい、そう思って土地の保全を行ってきました。しかし、土地を受け継いで活用してくれる人がなかなかいない。これからの若い人たちに浪江町の土地を引き継いで育ててほしいというのが、今の切なる願いです。

再建を果たした諏訪神社の前で



長い避難生活を乗り越えた今、ふるさと「浪江」を覚えていてほしい。

北幾世橋北行政区

佐藤 幹治 さん

地震が起こった3月11日は、勤め先だった「ヘルスケアーふたば デイサービスセンター」にいました。この施設は緊急避難場所になっていましたから、利用者や避難者の面倒をみていたのです。その間に浪江町が津波に襲われました。そして翌12日、原発事故が起こりました。爆発音がして、ものすごい量のゴミが紙吹雪が舞うように降ってきました。ヘリコプターや自動車などで避難した利用者や職員と一緒に、川俣町の体育館から、埼玉県のさいたまスーパーアリーナへ。その後、私は東京の親戚のもとに行きました。家族はバラバラで、全員が一緒に住めるようになったのは2016年。被災から5年後のことでした。現在はいわき市に家族8人4世代で暮らしています。

それでも、私はいつか浪江町に帰りたい。浪江は、海や山、朝日と夕日が眺められるいいところ。帰ってこられない人もいると思いますが、ふるさとは浪江だとみんなに覚えていてほしいな。

震災後の北幾世橋での稲刈り

避難中に父が亡くなり、田んぼはできなくなった。震災によって失われたものは大きい。

幾世橋行政区

森　一夫 さん

突然避難生活が始まり、親戚らを頼って1日ごとにあちこちを転々としました。不規則な生活が続いたことから、糖尿病を患う父の具合が悪くなり、入院することに。その後、大腿骨骨折、膵臓がんと闘病が続き、父は震災の翌年11月に亡くなりました。ですから、避難生活の最初の1年半は看病とともにあったことになります。大変な思いもしたし、震災さえなければ父は変わらずにいられたのではないか、もっと生きられたのではないかと、やりきれない気持ちを抱えることにもなりました。

震災前に勤めていた郵便局を早期退職し、現在の生活は農業と釣りが中心です。水源の汚染で今は水が確保できず、田んぼは難しい。ですから、自宅前の畑で季節の野菜を作っています。いつかは自分の田んぼで作ったお米を食べたいなと思います。釣りも続けていて、ようやく相馬の遊漁船で出かけられるようになりました。かつては釣りクラブのみんなで請戸に行って釣りを思い切り楽しんだ。自然のありがたみをしみじみと感じますね。

妻の誕生日に自宅前で孫8人に囲まれて

稲が育つ田んぼを見て、浪江町の復興を感じてもらえればいい。

北幾世橋北行政区

安部 正之 さん

2019年から営農を始め、米を作っています。以前は製薬会社の工場に勤めていましたが、被災して操業停止に。震災の翌日から、南相馬市、福島市、新潟県、千葉県を転々とし、転勤先の配送センターがある栃木県下野市に落ち着きました。しかし、これまでとまったく違う仕事に馴染めず退職。この先何をやろうと考えていたところ、南相馬の知人が「パイプラインが整備されているなら田を耕作してみたい」と言ったんです。確かにうちの地区の田んぼは17ha全部に農業用水パイプラインが敷設されていた。それじゃあやってみるかということになりました。

今は姉を加えて3人で合同会社を作り、私は下野と浪江を行き来しながら、新規就農者支援を受けて稲を育てています。最初の年は6ha、翌年は17haを作付けしました。田んぼにはやっぱり稲があるのがいい。農業の再興を通して、浪江の再生を図り、町として維持できるよう、稲が青々と育つ田んぼを次世代に引き継いでいきたいと思います。

自宅前の荒れ放題の庭

2020年8月リフォーム後

辛いこともいい思い出もあった避難生活。今は田を耕すことで未来を拓きたい。

北幾世橋南行政区

紺野 信子 さん

地震が起きたとき、社協の登録ヘルパーとして移動入浴の介助をしていました。慌てて家に帰ると、津波が来ると言われてすぐに高台の幾世橋小学校に避難。そのとき下を見ると建物があった場所が一面海になっていました。信じられず、不思議な思いがしました。避難中には、認知症の母、0歳、4歳、5歳の乳幼児を伴って体育館で過ごしたこと、横浜まで遠路タクシーで向かったことなど、辛いことや心細いことがありました。その半面、二本松の方々や横浜の市営住宅の皆さんに親切にしていただいたことは、忘れることができない思い出です。

丹精込めて野菜作りにいそしむ

震災から10年が過ぎようとしていますが、あっという間でした。震災から6年で自宅に帰ることができ、これまでやってきた農業を復活させ、9年目にして米の作付けができました。今思うことは石川啄木の「ふるさとの山に向ひて 言ふことなし ふるさとの山はありがたきかな」。百姓精神を忘れずに、ひと鍬ひと鍬、町、地域、わが家の将来を耕していきたいと思います。

復興の道を着実に歩んでいる浪江町。次代を創る若者にエールを送りたい。

北棚塩行政区

志賀 正雄 さん

自宅は、東京電力福島第一原子力発電所から直線距離で北方約10kmほどの場所です。震災翌日、私たち家族は家の中にいると危ないと思い、車の中に避難していました。近所の方から「棚塩の沿岸部、小高区の浦尻地区が津波で流された、請戸も南棚塩も――」。それを聞いて、原発も危ないのではと思い、避難することにしました。向かった先の苅野小の校庭は車がいっぱいで、とても入れるような状況ではありませんでした。そこから津島へと避難し、津島中学校の体育館で二晩ほど過ごしました。津島から二本松の石井体育館、二次避難先は猪苗代のペンション、福島市、そして南相馬市へと避難生活を繰り返し、ようやく生活が安定してきたところです。

現在も原子力発電所の設計基準や監視体制には、疑問を抱いています。私たちが避難生活を送っている間、東京電力は第一・第二原発の廃炉を決定し、北棚塩地区に計画されていた原子力発電所の建設計画をご破算にし、ここに新しい企業や工場が次々に建設されています。浪江町は今、復興の道を着実に歩んでいます。この町の将来を健全に発展向上させてくれることを若い世代に期待してやみません。

町の未来をひらく棚塩産業団地

流されてしまった集落、別れ別れになった仲間。それでも故郷はここにある。

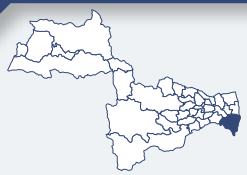
南棚塩行政区

横山　開 さん

緊急避難場所の棚塩霊園から、ボイラーを確認しに勤め先のマリンパークなみえへ向かったときに見た光景は忘れることができません。海側に目を向けると、普段は見えないはずの波が見えたのです。いつもは砂混じりで黒く見える波が本当にきれいなブルーでした。一目散に車で霊園に戻る途中、道路脇では真っ黒い波が家々を包み込みながら押し寄せてきていました。なんとか高台にたどり着けましたが、あと1分でも遅かったら巻き込まれていたかもしれません。

避難は、南棚塩の集落の人たちと一緒でした。霊園から北棚塩集会所、苅野小学校、相馬市の相馬アリーナ、そして福島市の福島県立福島北高等学校へ。しかし、団体での移動が難しくなり、各自避難することになりました。「落ち着いたらまた再会しよう」とみんなで話し合って、胸がいっぱいになりました。それから10年。集落の再建は叶っていません。浪江町に帰るのはお墓参りのときだけ。それでも、帰れる故郷があるのはいいものだと思っています。

2011年4月13日のマリンパークなみえ



手元に残ったのは背広とネクタイと革靴。今も帰れない寂しさを感じる。

請戸南行政区

竹村 英男 さん

地震が起こったときは、富岡町の勤め先にいました。揺れが収まったので家に向かったのですが、いつも通っている海寄りの浜街道は渋滞すると思い、国道6号線に出ました。もし浜街道を帰っていたら、今私はいなかったかもしれません。浜街道のあたりから海側は波に飲み込まれてしまいましたから。請戸に近づくと、街は水に浸かっていて、浮かんでいるように見えました。途中、双葉厚生病院の東側を走った時、周辺が水浸しになっている様子を目にしましたが、そのときには自分の家がなくなっているという感覚はありませんでした。でも、家は流され土台だけになり、手元に残ったのは、営業用の背広の上下、ネクタイ1本、そして革靴だけでした。

今は娘が住む福島市に妻と居を構えていますが、月に4～5回、防犯パトロールのため浪江町に通っています。お墓は新しく建てたので、近くに行ったときに手を合わせています。生まれたときから住んでいた家、場所がなくなり、帰れない寂しさを感じています。

防犯見守り隊発足時の1班メンバーとともに

前向きに新たな暮らしを送りながら、ふるさと請戸を後世に残したい。

請戸南行政区

紺野 廣光 さん

子どもたちの家との行き来に便利ということもあり、現在は郡山市に妻と2人で住んでいます。

震災当日の夕方に町役場に寄った時、請戸がすべて津波にやられたと聞き、様子を確認しに自宅から3kmほど離れている天神渕橋を見に行きました。すると自宅の前にあった建築中の建物が流されてきており、うちも駄目だと直感しました。将来に希望をもつには生活を再建することが必要。住宅を求めてここに住むと決めたら、少し安心することができました。もちろん寂しさはありますが、やりたいことができるなら、ここにいても請戸にいても変わらない、自分から動けば人とのつながりもできると考えるようになりました。

震災後、請戸地区に残っている石碑・石仏を大字委員会で調査し、集めました。今はこれらを「先人の丘」に建立してもらい、ふるさとに住めなくなってしまった人たちの拠り所にしたい。そして、後の人たちに、ここに請戸があった、人々の生活があったということを伝える場として残すことができればと願っています。

津波によって流された自宅

津波に飲み込まれ住めなくなった請戸。でも、負けるなよ。

請戸北行政区

五十嵐 光雄 さん

請戸小学校の児童たちの命を助けたことで知られる大平山で、私は津波の第二波をやり過ごしました。この第二波で請戸がなくなったのです。大平山からは請戸の全域が見えます。最初は地平線が真っ白になりました。波が砕ける白さ。その次にやってきたのは、波が海底を掻いて砂を巻き上げたため、真っ黒に見える波。波の高さは15mにもおよび、境の松の上を越え、そして浜街道もゆうに越え、やがて、車から人から家から目の前を流れていきました。波が引いたとき、コンクリートでできた大きな建物以外、請戸の家は1軒も残っていませんでした。

その大平山に、今は災害公営住宅ができ、入居者が暮らし始めました。数年前には、請戸漁港が復旧され、荷捌き施設ができ、水産加工場が再開されています。一方で、農業再生プログラムが行われ、圃場整備へと向かっています。請戸は災害危険区域に指定され、住むことはできません。でも、復興が進み、少しでも周辺に人が戻ってきてくれればいい。負けるなよ、請戸。

すべて流された自宅跡の片隅で見つけた小さな命。
元気に育つカラシナが勇気をくれた（2012.3/17）

新しいコミュニティを大切にしながら、町の足跡も残していきたい。

請戸北行政区

佐山 弘明 さん

地震発生時は仕事で宮城県岩沼市におり、請戸の家は津波と原発事故で町の姿を確認することなく、なくなってしまいました。現在はいわき市小名浜にある福島県の復興公営住宅、下神白団地に住んでいます。ここには浪江町に加えて、双葉町、大熊町、富岡町と4町の住民が入居していますが、町ごとに事情が違うためか、当初は交流が進みませんでした。私は管理人を務めていたこともあり、支援団体の方々と協力して、自治会の設立を進めることにしたのです。2015年8月に浪江町、翌2016年3月までに残る3町で、そして同年8月に団地全体としての自治会が誕生しました。自分たちの住んでいた場所はなくなってしまいましたが、新しいコミュニティは人と人の絆を結び直してくれるのではないかと思っています。

一方で、自分たちが請戸で暮らした足跡を残したいとも考えています。そのひとつが苕野神社。昔からの海の守り神で、かつての県社。そこを残したい。町と相談して、小さくてもいいから元の場所に建立しようと動き始めたところです。

下神白団地の秋祭り交流会の様子

記録と教訓を後世に伝える遺構ともに、津波ガレキの「思い出の品」の管理運営に取り組む

中浜行政区

川口　登 さん

2014年に開設された思い出の品展示場に保管されている収集物の管理運営に携わっており、津波ガレキの収集作業に併せて拾い集められた物を「思い出の品」と称して持ち主に引き渡しできるように取り組んでいます。収集物の中には、置物や装飾品、時計や位牌、鞄、写真など、いろいろな物があります。誰の物か分からないことが多く、自分の「思い出の品」がないか見に来た人が申告をして持ち帰っています。ただ、収集物は年月を経て劣化が激しくなっており、特に子どもたちの持ち物は引き取られることが減っています。

生まれ故郷である請戸は、災害危険区域に指定され、住むことができません。海岸防災林造成事業によって震災前の面影は消え失せ、沿岸部は様変わりしています。仕方がないと思う半面、悔しさも残ります。そんな中、浪江町立請戸小学校が震災遺構として保存されることが決まり、自分にとって救いになっています。この遺構が記憶の風化を防ぎ、震災の記録と教訓を後世に伝えていくことに期待しています。

大津波に飲まれていく請戸小学校

寒さと不安のなかで過ごした一夜を忘れずに、これからも浪江町の見守り隊でいたい。

両竹行政区

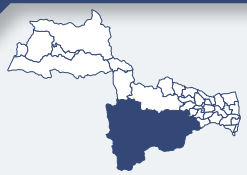
竹添　武 さん

地震が来たとき大熊町で働いていた私は、慌てて自宅に向かいましたが、家には入れず、裏山の一次避難場所へ。諏訪神社まで110段の石段を駆け上りました。でも、本殿はつぶれていて、社務所も傾いていました。怖くて建物には入れない。寒さのなか、壊れた本殿の柱を燃やし、境内で40数名が不安な一夜を過ごしたのです。現在、諏訪神社は再建されており、2020年8月には人々が津波から逃れて一夜を過ごした地として記念碑が建立されました。私の避難生活は諏訪神社を下りてからのほうが長く続きましたが、あそこで過ごした夜が、最も印象に残っています。

2018年に両竹の区長となり、毎年大字会を開催してみんなで集まっています。これからもなるべく続けていきたいとは思っていますが、両竹にはもう住めません。ですから、大字会はいずれ解散になるかもしれません。でも、諏訪神社の再建に関わったように、何らかの形で浪江町とはつながっていたい。これからも浪江町の見守り隊でいたいですね。

震災直後の諏訪神社の社務所（2011.4/16）

みんなの力で再建された諏訪神社（2019.11/1）



～この10年を振り返って、いま思うこと～

谷津田地区の復興には困難が多い。でも前を向いて進んでいきたい。

谷津田行政区

原田　榮 さん

私の場合、浪江町に住んで双葉町役場に勤めていましたので、避難は少し特殊だったと思います。母や家族の安否確認後は、双葉町民と行動を共にしました。川俣町からさいたま市へ向かい、最終的に加須市の元埼玉県立騎西高等学校の校舎に移動して半年ほど過ごしました。多くの人々と役場職員として24時間過ごすわけですから、三交代とはいえ気が休まることはなく、仕事をしているのか避難しているのか分からない状態でした。

被災1年後に役場を退職してからは、谷津田地区の区長としての仕事に注力してきました。私たちの地区は三方を帰還困難区域に囲まれています。水源も地区内になく、すぐに稲作を再開するのは難しい。そこで、地区全体でソーラー発電ができるよう2016年から4年かけて交渉し、2020年10月から商用送電が開始されました。これが最終目標ではありませんが、復興の1ページ目にはなると思います。後ろを振り返るより、失敗を恐れず前を向いて進みたい。それが今の私の気持ちです。

浪江町谷津田地区メガソーラー発電所

自然とともにある生活が一変した今も、生まれ育ったふるさとへ思いは変わらない。

畑川行政区

齊藤　基 さん

畑川地区は高瀬川渓谷沿いの奥にある16戸の小さな部落です。自然豊かなところで、町の観光地として地区外からも多くの人が訪れていました。春のヤマメ釣りや山菜採り、夏は鮎釣り、秋には紅葉狩りや芋煮会、キノコ採りなど、自然の恵みも多くありました。地域の作業などでは、みんなが参加して、終了後の芋煮会やバーベキューは楽しいものでした。

ところが、畑川地区は震災と原発事故で帰還困難区域となりました。「避難ー!」のひと声で各地を転々としました。長引く避難生活の中で父は亡くなりました。すぐには納骨もできず、2年後に畑川にあるお墓を改修して納骨しました。いずれは私もそこに眠りたいと思っています。帰還困難区域の方針は未だ決まらず、年々荒廃していくふるさとを見るのは辛いものですが、ふるさとへの思いはなくなることはありません。この先どんな形であれ、ふるさとの畑川が残り、人々の往来ができることを願っています。町には、早く帰還困難区域の方針を示し、ふるさとの再生に力を注いでいただきたいと思います。

地区住民との再会を喜ぶひととき

自然に寄り添う暮らしが懐かしい。でも時間を巻き戻すことはできない。

井手行政区

松永　勝 さん

地震に見舞われた翌々日、娘と生後間もない孫を送って千葉県流山市へ。すると東京電力福島第一原子力発電所の事故が拡大し、そのまま娘の家で2カ月程生活しました。隣接する柏市で福島県からの被災者を受け入れていたため、その後は柏市内の借上げ住宅で約6年間を過ごし、同地で自宅を手に入れ、現在も暮らしています。住まいのあった井手行政区は帰還困難区域。当初は元の生活に戻りたいと思っていましたが、どんどん難しくなっていく。生活の空気を残した自宅が荒れ果てていくのを見るのは忍びない思いがします。

浪江では、山間の農地で野菜や果物を育て、特にエゴマ栽培に力を入れていました。四季の恵みを受け、自然とともに生きることが私の望みでした。ところがそうはいかなくなった。人と人とのつながりが薄く、縁が少ない都会暮らしは物足りなさを感じます。これからのことを考えると不安もあります。でも時間を巻き戻すことはできません。震災は歴史の1ページと受け止め、前に進んでいくしかありません。

荒れ果ててしまった自宅前の畑（2018.6/10）

かつては地区の中心だった小野田も変わる。せめて浪江の名を次世代につないでほしい。

小野田行政区

愛澤　格 さん

被災時は町議会議員として町を支え、その後は小野田の区長を務めることになりました。それからは、現在住んでいる福島市と行き来しながら、地区民の心の拠り所である天神社や集会所周辺の環境整備を続け、人々と役場との連絡調整を図ってきました。

小野田には85戸300人くらいの住民がいました。でも、現在生活の拠点を戻しているのは4世帯。小野田は、大堀地区のひとつで、かつての大堀村の中心的な地域だったのです。役場や小・中学校など村の公共施設のほとんどがありました。大堀地区全域に檀家がある清水寺もありますから、私としては小野田が大堀地区の中心地域だという自負がありました。しかし、残っていた小学校は廃校が決定し、取り壊しの方向となりました。残念です。天神社は改修され、存続するので、安心しています。

私が暮らしていた地域は変わってしまいますが、浪江という町の名は残してほしい。今は町に帰るという決断をした人に託すしかありませんが、次世代につないでくれることを切に願うばかりです。

改修が進む天神社

震災で途絶えそうになった農地とのつながり。私たちの手で守って浪江の将来につなげたい。

田尻行政区

原中 正義 さん

震災前は、将来の地域農業のあり方について地域の仲間と話し合い、ブロッコリー栽培に取り組んでいました。ようやく軌道に乗り始めた4年目に、地震と原発事故に襲われました。伊達市の姉宅に避難した後、相次ぐ原発事故に追われるように喜多方市へ避難し、約2年間過ごしました。その後、除染に合わせて自宅や農地の管理をするため、少しでも浪江に近い福島市に家を建て、現在も住んでいます。

2016年からは農事復興組合長として、農地の保全管理に携わるようになりましたが、残念ながら田尻地区では、まだ営農再開の条件が満たされていません。浪江町は南、北、西のどこから来ても、まず目に入るのが農地。農地が復興しないと町が復興したという実感が持てないと思います。整然と管理された農地を眺めると気持ちが落ち着きますが、これは私たち農家に共通した気持ちじゃないかな。今回の事故では若い担い手も少なくなってしまいました。将来の営農形態は以前と変わるかもしれませんが、いま少し頑張って浪江の農地を次の世代につないでいきたいですね。

「こんなことを繰り返してはならない」（2011.9/9）

地区のシンボルである大堀相馬焼。その復活を通して地域の復興も願う。

大堀行政区

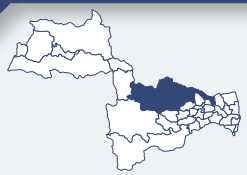
半谷 秀辰 さん

国の伝統的工芸品に指定され、青ひびと走り駒が特徴の大堀相馬焼。窯元が集まる大堀地区は帰還困難区域となり、元の場所で作陶することはできません。窯元は散り散りになってしまっています。窯元の一人として、また大堀相馬焼協同組合理事長（当時）として、伝統を守りたいという思いから多くの方々に働きかけ、震災の翌年に「陶芸の杜おおぼり 二本松工房」を開設させました。プレオープンには、多くの浪江町民の姿が見られ、大堀相馬焼が町民の心の拠り所になっていることをあらためて感じました。

大堀相馬焼の青ひびを生む釉薬の原料は浪江町で採取されるもの。震災で放射性物質が拡散してその入手が困難になり、一時は大堀相馬焼を復活できるかどうか危ぶみました。しかし、福島県ハイテクセンターの協力によって釉薬を再現することができました。同じように大堀地区も再スタートさせたい。そして、自分が区長を務める大堀の名を地図に残すという覚悟をもって地域の人たちとつながっていきたいと思っています。

震災直後の工房

陶芸の杜おおぼり 二本松工房での陶芸教室



～この10年を振り返って、いま思うこと～

常磐線を走る列車のように、ふるさとに元気を取り戻したい。

西台行政区

大倉　満 さん

震災当時は大熊町のJR大野駅（一人勤務の駅舎）で、25時間拘束の当直勤務中でした。駅舎が揺れ、エレベーターホールの口が開いてしまい、ホームの笠石が線路へと落ちて、列車の運行もストップしてしまいました。停電になったので、夜までロウソクの灯りで過ごしました。家の様子を見に一度戻り、翌朝4時過ぎに大野駅に出社したのですが、このとき避難者を乗せるためのバスを何十台も見ました。列車も不通となっていたため、再び家に戻り、妻と母親、愛犬と愛猫を連れて原町の雲雀ヶ原に避難しました。

西台は当時106戸ありましたが、みんなバラバラに避難しました。その後、福島市、二本松市と避難所が変わり、浪江町が用意した本宮市の応急仮設住宅に落ち着いたのが2011年の8月。6年の避難生活を経て、広野町の県営復興住宅に引っ越しました。現在は自宅のある浪江町に通う毎日です。震災時、ふるさとの室原川橋梁は損壊してしまいましたが、現在は修復され、元気に走る列車の姿を見ると嬉しい限りです。

修復された室原川橋梁

営農の再開は地域復興の第一歩。世代を継承しながら新たな道につなげたい。

藤橋行政区

佐々木 茂夫 さん

請戸川土地改良区、南相馬市農業経営改善相談員、苅野の復興組合と、震災を挟んで地域の農業にずっと関わってきました。現在は、藤橋の地域資源保全会にも加わり、定期的に水路やため池、用水路の草とりなどを行っています。荒れた農地では営農再開は難しいですから。その成果もあり、藤橋や隣の西台などでは新たな農業がスタートしました。また一方では、中間管理機構を活用して、地域だけでは管理できない農地のリース事業の準備も始めています。

私の祖先は富山から相馬にやってきました。相馬で大飢饉が起こり、日本全国から移民を募ったときです。そのときと同じように、福島県の原発事故の被災12市町村は、住んでいる人、避難先から通う人、新たに入ってくる人など、いろいろな人たちの知恵やノウハウを集めて、地域力を高めなければなりません。そして、世代を継承しながら、将来に向けた長い道を作らなければならない。そうすることが、避難や復興を支援してくださったみなさんの気持ちに応えることだと思っています。

藤橋地区で震災後初めて行った田植えに
避難先から駆けつけた面々（2018.5/12）

何が起こったかを伝える紙芝居との出会い。自分にできることをやり続けたい。

苅宿行政区

岡　洋子 さん

つらい避難のなかにあっても、浪江町のために何かしたいという思いがありました。そんなときに出会ったのが紙芝居。2014年には浪江まち物語つたえ隊が結成され、最初は応急仮設住宅で昔話を読んで歩きました。その後、震災を伝える『浪江消防団物語　無念』が誕生。それがアニメーション化され、全国から反響をいただき、フランスにも行くことに。私はこの紙芝居を読むことで、自分の居場所を見つけられたような気がして、双葉町にできた東日本大震災・原子力災害伝承館でも語り部として登録しました。次の世代に負の遺産を残すわけですから、どんなことがあったか伝えていかなければならない。二度と繰り返してほしくないという思いで、この活動を続けています。

浪江消防団の活動を伝える紙芝居「無念」

震災を経て、第三の人生がスタートしたと思っています。少しでも自分ができることをしようと、自宅の農地と倉庫で農園カフェもオープンしました。岡とカフェを合わせてオカフェ（OCAFE）。浪江の農業の復興に少しでも役に立てばと思っています。

ずっと続けてきた踊りでみんなを力づけられた。これからも人のためにできることを。

苅宿行政区

長岡 仁子 さん

1976年に武扇会と出会い、以来趣味としてずっと踊り続け、震災前には相双地区33教室で指導するまでになっていました。武扇会は新舞踊と日本民謡の会なので、一般の方にも親しみやすく、レクリエーション的な要素もあります。避難生活中には、みんなの気持ちが明るくなれば、運動不足の解消になればと、体操と踊りの時間を設けました。すると多くの人が楽しみにしてくれるように。やがて徐々に参加希望が広がり、新たな教室も生まれています。相双地区を代表する民謡『相馬流れ山』と標葉神社『浦安の舞』の保存会も立ち上げました。

地震のときは津波のあった棚塩地区で発表会の準備をしていました。揺れが収まって集会所の扉を開けると、目の前の地面は液状化現象で波打っており、突然の地割れに車一台が落ちてしまいました。被害の悲しい場面も目にしています。私は寸前のところで被害を免れましたが、思い出すと未だに足が震えます。私は生かされたのだと思います。以前にも増して強くなった「人のために」という思いを胸に、これからも活動を続けていきたいです。

震災後、町で披露した『相馬流れ山』と『浦安の舞』（2017年11月）

故郷の原風景を取り戻すため、世代が変わらないうちに町の復興を。

立野下行政区

若月 芳則 さん

震災後、農協の仕事に携わることになり、あらためてきれいな水田に稲穂がなびく原風景が必要だと思うようになりました。たとえ町のインフラ整備等が進んでも、そういう風景が戻らないと、町民が帰還を希望するような雰囲気にはならない。農業の再生が一層必要だと感じています。

避難中の白河市で両親を亡くしましたが、避難先にもかかわらず、浪江の人や隣組の人、知人、友人などが葬儀に来ていただき、地域の連帯感というのはまだ残っていることを感じ、しみじみありがたいなと思いました。しかし、若い世帯は避難先に自宅を設け、子どもの教育なども含め、そこに生活の基盤ができつつあります。避難している町民には、浪江町というふるさとに対する思い、農家の後継者には先祖伝来の土地を守るという意識が強く残っているうちに、町をうまく復興させなければならないと思います。世代交代が進むと浪江に帰る理由がなくなってしまう。ここで育った仲間みんなで、そういうことを考えていく必要があると、思いを強くしています。

避難先で生まれた新しい絆「浪江ネットワークしらかわ」

自由に立ち入りができる“ふるさと”に戻してほしい。

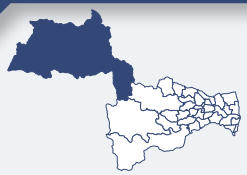
室原行政区

栃本 勝雄 さん

避難後は福島市の借上げ住宅を転々としながら、福島中央浪江町自治会の代表として支援物資の配給やコミュニティづくりなどを行っていましたが、やがてここで落ち込んでいてはもう先が見えなくなる、一歩でも二歩でも前に進もうと考えるようになりました。昔から埋蔵文化財などが大好きで、町から委嘱され浪江町文化財調査員を務めていました。また、室原行政区長でもあったため、室原の郷土芸能の復活を考えたのが2012年のことでした。そういった活動はまだ早いという声もありましたが、今やらなければ復興はより難しくなります。全国にばらばらになった関係者に集まっていただき、練習を再開しました。そして、県内はもとより青森や東京などの舞台で田植踊りや神楽を披露できました。

地元室原の八龍神社と秋葉神社では、7年に1度遷宮祭が催されます。しかし、帰還困難区域にあるため除染が大幅に遅れています。郷土芸能や祭りの復活は人と人の絆を保つために必要なこと。10年は長すぎる。1日でも早く除染を完了させ、自由に立ち入り可能なふるさとにしてほしいというのが私の願いです。

田植踊りを披露した青森県の八戸市公会堂で（2013年10月）



震災後もずっと津島にかかわってきた。いつかコミュニティを復活できる日がくればいい。

津島行政区

高橋 美雄 さん

3月11日、津島地区の地区会長だった私は、避難してきた多くの人たちに対応しました。一時は約8,000人が押し寄せ、小・中学校や高校、集会所などに分散、各家庭にも引き受けてもらいました。その後、津島からも退避になりましたが、町内にまだ取り残された住民がいる。避難用大型バスが出る津島へ輸送するため、何往復もバスを走らせました。一連の避難が終わっても、地元民が取り残されていないか確認できるまで、私は津島を離れませんでした。私自身が二本松市東和地区に避難したのは、20日ぐらいだったと思います。

現在、津島地区は帰還困難区域ですが、地区内の一部は特定復興再生拠点区域になっており、除染や家屋解体等が進められています。つまり区域内以外は手付かずということ。そのため、津島区民はどこに住まいがあるかで状況が異なり、考えも違ってきます。私は、復興組合の組合長をしている関係で何度も津島に通っていますが、いつかはちゃんと帰りたい。昔のようなコミュニティを復活させたいですね。

除染を終えた農地が広がる津島地区

津島で過ごした家族の日々と地域での暮らし。形にして残すことでふるさとをつなぎたい。

下津島行政区

今野 秀則 さん

震災時、下津島の区長として地区住民への避難呼びかけを終え、家族で福島市の妻の実家に落ち着いたその晩、ふと「二度と津島の自宅に帰れなくなるかもしれない」という気がしました。そのため、これまでに撮りためた写真を収めたアルバムを持ち帰りたいと痛切に思いました。何よりも自分の家族の歴史がなくなってしまうような気がしたのです。いてもたってもいられず津島に向かい、一部ですが写真を持ち出すことができました。

同じように、津島の記録を少しでも残したいという気持ちが湧いてきました。当時勤めていた福島県社会福祉協議会の仕事をしながらも、津島という地区が、自分のふるさとが消滅するかもしれないという思いに苛まれたのです。そこで、少しでも津島住民の声を聴いて、地域の様子や歴史、暮らしを記録しようと退職を決意。結局、社協で事業化されることになり、16人から聞いた話を冊子にまとめました。

かけがえのない日々を過ごした津島。そんなふるさとの行く末が今も見えないことが残念でなりません。

冊子「3.11 ある被災地の記録」

酪農家として誇りをもって最後まで牛と向き合った。これからは自分にできることを続けたい。

南津島上行政区

紺野　宏 さん

私は、両親と一緒に長年酪農に携わってきました。多いときは59頭、震災時には35～36頭の乳牛を世話していました。牛が相手の仕事なので、同じ日は2日とありません。酪農は難しい。そして面白い。牛を理解し、どう付き合っていくかで酪農家の技量が問われるのだと思います。地震に見舞われたとき、私は先に両親を避難させ、その後も牛の世話を続けました。5月に津島地区の酪農家10戸の牛を二本松市岩代地区に避難させ、さらに1カ月ほど牛たちと過ごしてから、郡山に避難しました。そしてみんなで相談し、牛を手放すことに。乳を出荷できない牛にかかる経費が今後、負担になるためです。寂しくはありますが、最後まで牛飼いとしてできることをしたという誇りは10戸の農家みんなが持っていると思います。

今、新たに取り掛かろうとしているのは、自宅に残された農地の整備。何か景観作物を作りたい。農地をきちんと整備して農地らしくしておくことが、今の自分にやれること。気負わずに続けていきたいと思っています。

震災から約1カ月、静まりかえった町内

戻れるものなら戻りたい。津島を離れていま思うこと。

南津島下行政区

古山 久夫 さん

震災前は津島地区で約300頭、息子が南相馬市原町区の牧場を借りて250頭の牛を肥育していました。2011年3月15日に二本松市東和の体育館に避難したのですが、残してきた牛たちのことが気がかりで、2日後には自宅に戻ることにしました。6月上旬にはいわき市の鶴石山にある牛舎に3日間かけて牛を避難させました。翌2012年3月に出荷が一段落したのを機に、現在の土地（いわき市三和）に移住を決めました。山を開墾し、牛舎を建て、始めは30頭の繁殖牛からのスタートでしたが、ようやく約150頭まで増やすことができました。

現在、津島地区は帰還困難区域ですが、戻れるものなら戻りたいと思う人はたくさんいると思います。しかし、年月が過ぎれば過ぎるほどその意欲はなくなってくるし、身体の弱い方も中にはいます。私たち畜産農家から見ても、津島地区は牛を育てるすべての条件が整っており、堆肥を運ぶのにも利便性が良い場所でした。それだけに残念でなりません。

新天地いわき市で飼育にいそしむ

みんなで助け合って新たな農業を展開。その実績は未来の浪江町にもきっと役立つ。

赤宇木行政区

今野 義人 さん

江戸時代から先祖代々の土地を受け継いで、ずっと農業をやってきました。最近では、農業ができなくなってきた人から田畑を請け負ってほしいという話が出てきたため、区内に「あこうぎアグリ生産組合」を組織し、農地を集約して大豆の生産を始めました。さらに組合内に米部会も設け、後進の育成を図りながら、作付けから加工までを一手に引き受けました。そんな活動をしているときに、被災しました。

赤宇木地区は山間の小さい集落です。みんなどこに誰が住んでいるか知っていて、気心が知れた間柄。昔は泊まり合って農作業を手伝ったりもしました。集落が大きな家族みたいなものでした。それだけに、帰還困難区域になっている今も帰りたいと思っている人は多い。私も同じ気持ちです。

浪江町の歴史は農業や漁業とともに歩んできた。だから、震災から復興するためには第一次産業を復活させることが必要だと感じています。そのためにはどうすればいいかを考え、町の復興を進めていただきたいと思います。

震災前の赤宇木

消防団として最善を尽くしたと思う。これからは絆をつなげることしかない。

大昼行政区

佐々木 保彦 さん

シイタケ栽培や会社勤めの傍ら、46年間、消防団に携わりました。原発事故の影響で浪江町の全町民が避難することになり、2011年3月12日から4日間、津島地区では7,000人以上の避難者を受け入れました。消防団員は学校や集会所、公共施設などで炊き出しや物資の配給、簡易トイレの設営などにあたり、副団長だった私は全体を指揮しました。15日にはみんなで二本松市東和地区に避難。現地到着後、消防団は役場職員と一緒に支援物資の仕分けや配給を担当しました。消防団としてできることは精一杯やったつもりですが、町の状況はずっと気になっていました。

現在は浪江町民の自治会「コスモス南達会」で、本宮市・大玉村地区の会長を務めています。2カ月に1回、年中行事やスポーツ大会、1泊旅行などを行って、みんなで話をする機会をつくっています。津島地区は復興拠点になっていますが、大昼は対象外。先が読めません。ですから、せめて浪江の絆はつないでおきたい。今の生活に苦労はありませんが、ふるさとに何もできないことに悔しさを感じています。

震災前の浪江町消防団春季検閲式

コスモス南達会の宮城旅行（2019年8月）